



中央図書館と文学館の全景

2F常設展示場 北九州文芸ギャラリー

北九州市立文学館

友の会会報

第2号

平成27年10月

「北九州市立文学館・友の会」二年目、会長として



北九州市立文学館友の会会長

後藤 みな子

昨年「友の会」は「赤毛のアン展」「ノントン展」の物品販売のお手伝いをさせていただきました。会員の方の声として、「友の会」は、物品販売などのお手伝いではなく、文学に直接かかわる仕事をしてはどうか、という意見をいただきました。

この時の物品はすべて「アン展」「ノントン展」の作者、作品に直接関係しているものです。品物を手にとって、再び展示を観る。私自身、作者にも作品にもより関心が深まりました。そして、会場が賑やかに、華やかになりました。展示会場が賑やかな雰囲気になるのはとてもいいことだと実感しました。

「友の会」発足時、私は会員一人一人の声を聞きたいと思いました。「アン展」「ノントン展」の物品販売のお手伝いをお願いする為、会員のお名前を名簿で確認いたしました。会員の名簿を丁寧に見たのはこの時が初めてです。そして、販売のお手伝いに来ていただいた方と、直接お話する事も出来ました。勿論、それほど沢山の方にお会いしたわけではないのですが、私としては会員と

の繋がりを強く感じる事が出来た貴重な経験でした。

自主事業は、劇団青春座による朗読会を実施しました。

現在社会の中で「文学」の置かれた状況ははたとても厳しいです。文学書は売れません。そのことと「文学館」に入場者が少ないのと無縁ではありません。しかし、文学館は、本当の文学の力を指し、啓蒙する使命があると思っています。市民に親しまれる展示、そして本当の「文学」の力とは何か、を問い続ける「文学館」であって欲しいと思います。何が「友の会」としては出来るのか。「友の会」の会員は何を望んでいるのか。「文学館」と共に考え、悩み、会員の声を聴きながら伴走して行きたいと思っています。

友の会「総会」と記念講演

去る六月二十三日、平成二十七年度友の会総会を開催し、二十六年度事業報告・事業決算及び二十七年度事業計画・事業予算について御承認をいただき無事に議事を終えることが出来ました。

その後、友の会の理事で、福岡県川柳協会会長であり、古谷龍太郎先生から「人間を詠む詩 川柳」と題しまして御講演をしていただき好評のうち、総会を終えることが出来ました。



今回は、その講演の一部を紹介します。川柳は俳句と同じ連歌から派生した文芸である。連歌の練習方法として生まれた「前句付」が、煩雑なきまりのある連歌から離れて、一般に広く愛される文芸となった。

一七五七年淺草龍宝寺の門前の名主である柄井八右衛門(川柳)が立机(選者として名乗りを上げること)し、数年後には一回の興行(十日間)で一万句を集めるほどの一流の点者(選者)となった。更に、その川柳の名を江戸前句付点者の第一人者として不動のものとしたのは、一七六五年の呉陵軒可有の編集による「詠風柳多留」刊行であった。その後、狂句の時代が長く続いたが、明治に入り、川柳中興の祖といわれる阪井久良岐や井上剣花坊による「狂句百年の負債を返せ」の運動で、川柳本来の姿に戻った。その心を受けた川上三太郎、岸本水府など六大家の努力により現代川柳が花開いた。水府等は川柳の定義として、以下のように述べている。

川柳は人間諷詠である

川柳は人間である

川柳は人間陶冶の詩である

岸本水府
恒元紋太
麻生路郎

また、川柳の三要素として「笑い」「軽み」「うがち」がある。その本意は「笑い」＝腹の底からじんわり出てくる笑い、「軽み」＝リズム感のあるもの、「うがち」＝皮肉ではなく、事象の奥にある真理をえぐり出すものである。

これ小判たつた一晩居てくれる 古川柳
寝て居ても団扇の動く親心 古川柳
やさしい温みのある作品が溢れて欲しい現代である。

文学館「特別企画展」について

今年の「特別企画展」は、『戦後九十九年夏目漱石―漱石山房の日々』『ピーターラビットのおはなし』『ピエトリクス・ポターの世界』でした。

「友の会」は昨年に引き続き、企画展に並行して物品販売を行いました。特別企画展をより親しみのあるものにし、来訪者の満足感をより高めることにより、より多くの皆様に文学館に来ていただけたものと思います。

ところで、夏目漱石が「辛亥革命」の孫文と接点があったことはご存知でしょうか。漱石が『草枕』（一九〇六年）で「美の世界の住人」として描いた「耶美」（前田 案山子の次女・前田草がモデル）が、上京後は孫文と関わり、辛亥革命（一九一一年）の後衛の役割を果たしていたのです。孫文が生まれた一八六六年の翌年に、漱石は生まれています。

因みに、ピーターラビットの生みの親「ピエトリクス・ポター」が生まれたのが、一八六六年です。漱石、孫文、ポターは同級生であり同時代を生きていたのです。漱石とポターがロンドンの街角ですれ違っていたかもしれないと想像するのは楽しいですね。漱石とポターの特別展が相次いで開催されたのも、見えない糸で繋がれていたから……かもしれません。

（加賀美 淳之）



「坊ちゃん」©1966 松竹株式会社



「それから」©東映

楽しみながら体験して頂くことができましたようです。

八月の「戦後七十年、名画で振り返る戦争と戦禍を生きたヒロインたち」の特別上映では、最終週を林芙美子原作「浮雲」（監督・成瀬巳喜男 主演・高峰秀子）で締め括り、上映の前には、特派員として武漢攻略戦取材した林芙美子の「武漢一番乗り」の「ニュース映画」の映像もご覧頂き好評でした。

秋の特別企画展「アングク最前線―北九州発」でもコラボ上映を行う準備を進めております。こちらもどうぞご期待下さい。
（小倉昭和館主 樋口智巳）

映画と文学

北九州市立文学館と小倉昭和館のコラボ

「夏目漱石 漱石山房の日々」の特別企画展に協賛して、小倉昭和館では「夏目漱石原作映画」の上映を行いました。（五月二十三日～六月五日）

第一週目には、朝日新聞に百六年ぶりに再連載された「それから」（監督・森田芳光 主演・松田優作）と、漱石異色の作品を十人の監督がオムニバス形式で映画化した「ユメ十夜」を上映致しました。第二週目には、過去五度映画化された「坊ちゃん」（監督・市村泰一 主演・坂本九）、「こころ」（監督・市川崑 主演・森雅之）を上映致しました。北九州市立大学の留学生三十人が、文学館で特別展を鑑賞した後に昭和館で「坊ちゃん」を観る、トリプル協賛企画も行い、日本の文化を

おすすめの本

『炭塵のふる町』

後藤 藤 みな子 著

文学館友の会後藤みな子会長が一九七二年に発表した短編小説。二〇一一年集英社発行「コレクション戦争と文学第十九巻ヒロシマ・ナガサキ」に収録されている。

作品の舞台は、戦後まもない炭坑町。当時の筑豊の情景描写がまず凄い。「ボタ山のそばの煙突から吐きだされる炭塵まじりの煙に覆われたこの町の空は、日中も昏く垂れこめており、太陽は病んでいるように鈍い。人々の生活の描写もリアルである。

作品の主人公は中学三年生の彩子。父親は、長崎医大の助教授であつたが、ニューギニアに出征し、帰還後この町の町立病院長として赴任。母親は、息子を原爆で失った後、精神の不調をきたしている。この家族は戦争で傷つき、その記憶を重く担い続けている。

ある冬の日、天皇の行幸がある。母親は行動を規制されることになり、怒りを覚える彩子は自分が母親を守ろうとするが、母親は若い時の着物を着て家を抜け出す。母親を追った彩子はお召車の方を向いて、「おにいちゃんをかえせ！おかあさんをかえしてくれ！」と心の中で叫ぶ。軍需工場に学徒動員中の兄を探して、母と共に走った被爆直後の長崎の凄絶な記憶が克明に蘇ってくる。「髪が焦げ、皮膚が焼ける匂い。内臓がぶらさがった赤ん坊。祈りの姿勢の白骨屍体」。そして、彩子が「鍋のなかで青白く光る、幽かに鳴る兄の骨」の記憶を抱いて、炭塵と黒い氷雨のふる町を、冥い空へむかつてひたすら走るという鮮烈なシーンでこの小説は終わっている。

著者は、一九七二年発行の書のあとがきで、自分にとって書くことは、意識の底に沈めたものを、意識の上に掴みだし、言葉にする堪えがたく苦しい作業であるが、長崎の原爆で亡くなった人々と後遺症に苦しむ人々の声に耳を傾け、書き続けていきたい。それが自分の生きることでありたいと披歴している。被爆から七十年の今年、おすすめしたい作品である。
（三村保子）

自主事業

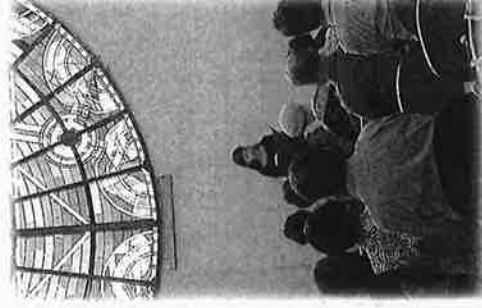
劇団青春座による朗読会

市立文学館友の会初の自主事業として、劇団青春座による朗読会が9月20日、文学館交流スペースで開催された。

青春座代表の井生定巳さんが発案。あすなろ書房「中学生ままでに読んでおきたい哲学」第1巻「愛のうらおもて」に収録された、向田邦子「ゆでたまご」▽杉浦日名子「恋人の食卓」▽寺山修司「愛され方」▽倉橋由美子「血で染めたドレス」▽森鷗外「じいさんばあさん」——の5作品を、青春座ベテラン座員の吉田美佐子さん、井上智之さん、吉嶺薫さん、瓜生紀美子さんの4人が情感豊かに朗読した。

約50人の参加者からは「情景が目には浮かぶよう」「最後まで引き込まれた」といった感想が聞かれた。「中学生ままでに読んでおきたい哲学」

は他に「悪のしくみ」「人間をみがく」などのテーマで第8巻まで出版されている。井生さんは「今後もテーマごとにも朗読会をシリーズで開き、文学館をアピールできれば嬉しい」と話した。(伊藤和人)



リレーエッセイ

劇団青春座の七十年

劇団青春座

代表 井生 定巳

「停電のため灯されたロソクの炎が、目白押しに並んだ皆の顔に、ゆらゆらと影を作っていた。男十一人、女十二人、世間のまだ誰も知らない劇団青春座の全員が集まってすでに三時間余りの討論をつくしたあとの熱っぽい沈黙だった。窓の外に真向いの八幡警察署の建物が黒々とそびえて、ところどころにロソクのあかりがゆらいでいるだけの、静かな戦後のたたずまいだった。」

八月八日の八幡大空襲で焼け野原となった昭和二十年十月、劇団青春座は、厳しい、がしかし、熱気の中で呱呱の声を上げた。「時期尚早」「今しかない」という意見がぶつかり合い、創立に参加したのは、十六人だった。

大宰治が、親交のあった劇団員に送った一通の手紙には「侘しい時には、毛布をかむって勉強するのだ。それが一番華やかな青春だ」。これがいいということで、「青

春座」と名付けられた。

翌昭和二十一年三月、馬場でただ一軒焼け残った「南座」で、旗揚げ公演を行った。演目は、石坂洋次郎の「若い人」。会場は復員姿や着物の人で超満員に膨れ上がったという。

昭和二十八年二月、北九州市誕生を期に、北九州演劇協会設立を主導し、市内の劇団を統合して、十年間に六回、全国でも稀な合同公演を提唱。その過程の中で、郷土の題材を掘り起こすという「郷土シリーズ」を青春座の路線とした。このことが、青春座を七十年間存続させる大きな原動力になった。

なぜ七十年間も続いたのか、それは、その存在を許し、苦しい時にも「青春座がんばれ」と、会場に駆け付けた観客がいたからだ。劇団青春座は、豊かな文化土壌に溢れた北九州市民に支えられて、二百二十五回の公演を行うことが出来た。

劇団青春座は七十周年を契機に、さらに前に進む。北九州市をもっともっと文化の街にするために。

会員投稿

「文学の魅力」

牧志哲己

文学館を訪れるといつも癒されるものを感じる。ステンドグラスからの陽光に心地よさを覚えるからだろうか。

先般、北九州市立文学館では特別企画展として夏目漱石展が開催された。開会式での今川英子館長の挨拶はとても印象深いものがあった。漱石が芥川と久米に宛てた「あせつてはいけません。世の中は根気の前に頭を下げる事を知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えてくれません」「人間を押すのです。文士を押すのはありません」という言葉につらかった若き日、いつも励まされたというお話は、心に沁みるものがあった。

文学館の漱石展と同時に近くのムーブでは、下関の梅光学院大学の小倉公開講座が漱石をテーマとして六回シリーズであった。その最終回を漱石研究の第一人者で今年九十八歳になる佐藤義正先生が務められた。私も佐藤先生の梅光での講座を受講してかれこれ十年目を迎える。

先日、佐藤先生にまつわる面白い話を聞いた。昨年から梅光の特任教授として京都の自宅から下関に教えに来られている浅野洋先生からである。〈近畿大学を定年で辞めていた私の元に佐藤先生から電話があった。「浅野さん、私のところに来ませんか」といきなり言われた。「私も六十半ばを過ぎていて、もう感ですから」と答えると、「あなたは私よりも二十歳も若いじゃないですか」と言われ、その一言が決め手となって、どうとう行くことになってしまった。また「浅野さんね、私、七十歳を過ぎてからやっと文学が分かり始めました」と言われた。これには参った」と話されていた。

このように私が知る文学者の言葉は実に魅力に富んでいる。日頃は建築の技術屋として文学とは無縁な仕事をしている私としては、いつも感心しきりである。また、「文学は人間学である」とは、佐藤先生の口癖である。

